

バニッシュメント・デイス・ワールド ——中二病的なアニメ、アニメにおける中二病の 表象、そして中二病——

徐 舒陽

はじめに

本稿は「中二病」のイメージを世界中に普及したアニメ『中二病でも恋がしたい!』（2012）からキャッチコピーを借りてタイトルにしている。なぜなら中二病を理解するのにこの一文は実に良い切り口を提供しているからだ。理解にあたって、「バニッシュメント・デイス・ワールド」はまず、英文の「Vanishment This World」に還元されることを拒絶している。英文にされた瞬間、バニッシュメントとは逆に、文法の問題が浮上してくる。とはいえ、問題を解決した先の「Vaporizing This World」や「Vanishment of This World」でも、中二病へ志向する本稿のアプローチの起点としては不十分であろう。そもそも呪文として詠唱される「バニッシュメント・デイス・ワールド」は世界の見え方を歪ませるもので、放逐する対象の規範を律儀に服従するのはおかしい。したがって、本稿のタイトルは以下のような理解を前提に機能する：真面目に英文として読むとそこには幼稚な間違いだけである。この上、本来まとまりの良い欧文単語をわざわざカタカナで表示しなおし、読みづらいものにする無駄な工夫まで施している。これほど恥ずかしい一文が作品のキャッチコピーとして堂々と叫ばれると、むしろ文法のほうが退けられる。中二病の世界において、正確な英文法やネイティブな発音といったものは、しばしばひねくれた形で規範としての力を失うのである。

「バニッシュメント・デイス・ワールド」、中二病はこのようなものと考え。ここからはじめて、中二病というシニフィアンを具体的な事象と接続させることが可能だ。次章で詳しく語用の歴史を辿っていくのだが、ここでは予め中二病に対する本稿の立場を明らかにしなければならない。本稿は医学的な診断の下で、生理的な病を扱うつもりはない。中二病は特定の対象を認識する際現れてくる現象であると同時に、幾重にも重ねた言説と作品によって媒介されていく表象の次元に生かされているものでもある。『隠喩としての病い』でソントグは既

に生理的な病（結核、癌、エイズ）と共にある表象の次元を批判的に捉えていた。ヒロインにロマンチックな死を与えて美化する結核、道徳面からも患者を懲罰し続ける癌、あらゆる作品に散在するこれらの常套表現の中、空想は今なお繁殖していく。「社会の癌」が比喩的な表現として普通に使われる現代の言説空間では、誰でも潜勢的には癌だといえる。2000年代以降、中二病にも似たような展開が見られ、中二病をめぐる表象の次元にアクセスする限り、潜勢的には執筆者を含めたあらゆる人間が中二病である。生理的にネガティブな特徴を伴わない中二病はソントグが扱う病の背後に潜む死の恐怖によって縛られず、その分、表象の次元では生理的な病が持ちえない豊かさや積極性、ユーモアまで窺える。一方、言動にのみ影響する特性からは、中二病はフーコーまたはドゥルーズ&ガタリと接続する可能性を示唆するだろう。したがって、「患者」、「発症」、「症例」などの言語表現を使いつつも、本稿はこれから病のネガティブイメージに逆行する仕方の中二病にアプローチする。

2000年代から、夕方や朝で放送されるようなアニメとは違った体質を持つ深夜アニメが頭角を現してきた。「萌え」や「学園」などいわゆる日本のアニメのイメージを世界中に広げたこれらの深夜アニメは、現代社会において極めて重要な意味を持つ中二病の概念を露呈させた。ところが、この概念を本格的に取り上げ、概念をめぐる一連な事象を学術的に扱うような研究は意外とほとんど行われていない。中二病は中学二年生の全員が「発症」するものでもなく、「発症」しても一時的なものと思われる。更に、「発症」の時期を過ぎると、何故か思い出すのに羞恥心によって激しく抵抗されるのがほとんどで、いわゆる黒歴史にされてしまう。ともあれ、「中二病」を客観的にアプローチするには、数多くのネガティブ要素によって拒まれている。

アニメやサブカルチャー研究の盲点にされている一方、中二病関連な要素は文化に根付いているともいえる。本文の第一章の中で具体的にまとめることになるが、中二病という単語自体は90年代から既に造語されており、また人を中二病の状態に陥落させるような作品は古くから生産され続けてきた。バトルマンガや伝奇小説、さらに17世紀の小説に出てくる騎士道物語に夢中なドン・キホーテを40歳からの中二病と呼ぶ声すら挙げられる¹⁾。確かに「診断」の目線から見て、中二病の状態にある人は、何らかの幻想世界を現実と混同しているように思われる行動をし、身の丈に合わないような発言をする。従来（主に90年代まで）の中二病は一般的な反抗期とは似たような部分が多いかもしれないが、本稿が注目するのはむしろそのあとの展開である。2000年代から、このような伝

統ある中二病は深夜アニメと絡み合い、大きな変容を遂げた。中二病的な想像力は深夜アニメ的な表象と高い親和性を示し、お互い影響し合う関係まで発展してきた。また 2010 年代の開始とともに、中二病コンテンツに夢中し、日常生活の中で異質な言動を繰り返すドン・キホーテと似たような体質を持つキャラクターがアニメの中で表象されるようになった。やがてアニメキャラクターにおいて中二病が一つタイプとして確立され、作品の中で独走しはじめた。

そこで本稿は中二病の概念の確認からはじめ、中二病的な想像力にソースを提供していたアニメを整理した上で、2010 年代における中二病のイメージ化の過程を分析する。そして最後は中二病の抗いを還元し、その病理へのアプローチを試みる。

一 「中二病」、「厨二病」、「邪気眼」：現在の中二病に至るまで

議論に入る前に、まずは一般的に使われている日本語としての「中二病」、「厨二病」、「邪気眼」などの概念を確認しておきたい。

現在ではあまり知られていないが、中二病という言葉自体は 1999 年の深夜ラジオ放送で生まれた造語と言われている。その時点では思春期（中学二年生頃）で見られる奇抜な言動やそのような言動に夢中している状態を指している。奇抜な言動は例えばマイナーな文学を好むようになることや勉強を放り出すなどで、周りで主流とされるものに対する小さな抵抗あるいは社会に対するささやかな反発程度でしかなかった。注目すべきなのは、中二病は外部の立場からその状態を揶揄する用語として出発していることである。つまり一般向けのラジオ番組の立場から語る不思議な少年少女、という構図をとっており、自ら名乗るものでは決してないのである。

ところで、周知の通り、既に 2020 年代に突入した現在では、前述の言動はただの反抗期や自意識過剰で済まされ、現在いわれている中二病は別のものに指向している。具体的な病状を説明するにあたって、比較的最近出版された『中二病超図鑑』（2013）にある説明は参考になる。ここでは中二病について説明するイントロダクション部分を引用しておこう。

オタク文化を象徴するようなキーワードとしてよく使われている「中二病」。概念としては「中学二年生くらいの思春期にありがちな、自意識過剰

やコンプレックスからついに背伸びしてやってしまう、麻疹のような妙な趣向・思考・行動」。そこから、「中二病」といわれている。別に本当の病気でもなければ、中学二年生だから必ずなるものでもない。

具体的な症例というか、あるあるとしては、「邦楽をバカにして洋楽にのめりこむ（ただし英語はわからない）」「大人や社会は保身しか考えてない嘘つきばかりで、俺は騙されない」「人生なんてとうせ思いどおりにならないからと、努力する人をバカにする」「その気もないのに、やればできると思っている」「プライバシーの尊重や言論の自由をバーゲンセール」「ブレイクしたバンドやアイドルを、売れる前から知っていたとムキになる」などなど。

いわゆる、今となっては笑えるあるあるネタの類いで、身の丈に合わない、または現実を直視していない痛い言動全般が中二病の根本。今ではその女子版「小六病」、世代あるあるに拡散した「高二病」なども、言葉として誕生している²⁾。

このイントロダクションは最初の一文からはっきりと中二病とオタク文化の関連性を指摘している。そして第二段落は（90年代の時点での）定義と対応する貴重な症例を幾つ並べている。「今となっては笑える」から分かるように、中二病を語る際には中二病の状態でない外部の立場が導入されており、やはり中二病という言葉は現在でも、外部の立場から特定の状態を揶揄する用語として使う傾向がある。しかし、中二病の根本に関して、「身の丈に合わない、または現実を直視していない」だけで済ませるには、まだ議論の余地があるように思える。中二病とオタク文化の関連性はイントロダクションの最後で言及されている。

そして今では、主に同人界などで「中学生くらいが考えそうな漫画設定」を称して「中二病設定」などと呼ばれていたものも内包。広義として「アニメ・漫画文化にありがちな世界観設定」そのものも、「中二病的」などと称される³⁾。

ここでの中二病設定の例として、魔法や超能力が存在するファンタジーものを挙げると分かりやすいだろう。「大人や社会は保身しか考えてない嘘つきばかりで、俺は騙されない」の症例を考えると、大人や社会のネガティブ面を暴露するようなダークファンタジーなら「中二度」がさらに増すだろう。また、「プライバシーの尊重や言論の自由をバーゲンセール」の症例も念頭に置くと、人間のアイデン

ティティを殺すような社会システムに加担することや人々からプライバシーと自由を奪うことを敵対勢力の「悪行」に入れると、また理想に一步近づいたはずだ。このように、設定を通して、中二病は簡単にアニメ・マンガと絡み合う。実際、高度な中二病として知られるアニメシリーズ「コードギアス」(2006～)はこの設定と合致するところが多い。既存の社会システムへのアンチはガンダムシリーズをはじめとするロボットアニメの伝統ともいえる。「コードギアス」の場合、主人公の敵は神聖ブリタニア帝国という階級差別まみれの専制君主制国家である。上流階級の優雅な暮らしと階級差別される人々が直面する悲惨な現実が描かれている。占領区の人々は自由と一緒に日本人としてのアイデンティティを奪われた。そして主人公は「ギアス」の能力を駆使し、反政府武装組織を率いて闘争し続けた。超能力、社会のネガティブ面の暴露、ダーク要素、自由とアイデンティティを守る要素のどれも見事にカバーされている。

中二病を意味する語彙として、「厨二病」と「邪気眼」もしばしば使われている。厨二病の表記は、ネットスラングで中学生を意味する「中坊」に「厨房」の字を当てていたことからきたといわれている。やや軽蔑のニュアンスで使う言葉だが、「中(学生)」ではなくなる点では現在の状況と合致している。中学生からは依然多発しているようだが、中二病設定が広義的なものとして理解しえる時点で、中二病はもはや中学生に限定されたものではない。そして邪気眼の場合、表記の違い以外、使い方も微妙に違ってくる。邪気眼はもともと2006年頃のネット掲示板のコミュニティからはじまった言葉で、『幽☆遊☆白書』(マンガ1990、アニメ1992)の人気キャラクター・飛影を意識して作られたものといわれている。飛影の設定としては、第三の目・邪眼が額にあり、それにより千里眼などの特殊能力が使える。そこからでも分かるように、学年で指示対象を示す中二とは違い、邪気眼は最初からアニメ・マンガと深く結びついている。『中二病取扱説明書』(2008)は中二病の症例をさらに細分化し、邪気眼を含めた三つの傾向を挙げている。

[邪気眼系]

自分には隠された力があると信じている(またはそういうキャラ作りをしている)人たち。不思議な力に憧れている。「邪気眼」という名の元ネタは某巨大掲示板上で書かれたとあるエピソードより。妄想系ともいわれる。

[DQN系]

社会に反する行動をとり、不良を演じる行為。根はまじめだったり臆病

だったりするので、本当の不良には決してなりきれない。喧嘩や犯罪行為に関する虚言が多い。もちろん実際には行わない。DQNとは「頭の悪そうな人」や「迷惑な不良系」を指すネットスラング。

[サブカル系]

流行に流されず、マイナー路線を好み、他人とは一線を画そうとする存在。本当にサブカルチャー好きなのではなく、他人とは違う趣味を持つ自分がかっこいいと思っている⁴⁾。

喧嘩をしないこととサブカルチャー好きではないことについての信頼性は保証できないが、三つの傾向のまとめとしては的確である。90年代の中二病の症例と比較してみると、サブカル系はほぼ一致で、DQN系は傾向自体こそ同じだが度合が増幅されている。そしてやはり一番目を引くのは邪気眼系であり、それまでとは全く違った展開を見せている。ここで挙げた中二病の一傾向として邪気眼を扱う場合以外、一部の中二病が発症した後から来る、妄想に溺れ、なかなか抜けられない重症状態をとって語られる場合もよくある。本稿が最も注目するのも、2010年代の新たな展開によって、世界中で認知度を高めている邪気眼系である⁵⁾。語源から読み取れるように、邪気眼傾向を持つ人が憧れる不思議な力や妄想の設定などを支えている膨大なソースの大半は、アニメ・マンガをはじめとするオタク文化によって供給されてきた。次章ではアニメを中心にこれらのソースを示し、整理を試みる。

二 中二病的な想像力を支えるもの：アニメからのソース

(前略) この郷士が、いつも暇さえあれば(もっとも一年のうちの大部分が暇な時間であったが)、たいへんな熱中ぶりでもさぼるほど騎士道物語を読みふけたあまり、狩猟の楽しみも、はては畑仕事のさしずさえことごとく忘れ去ってしまった。しまいにはその道の好奇心と気違い沙汰がこうじて読みたい騎士道物語を買うために幾アネーガという畑地を売り払ってしまった。こうやって、手に入るかぎりのそういう書物をことごとく己が家に持ち込んできたのである(後略)⁶⁾。

以上のように、『ドン・キホーテ』の第1章は熱心な読書家の描写からはじまっ

た。周知のように、風車を巨人と信じ込んで突撃するエピソードは彼がドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャと名乗る後の話だ。なるほど、言われてみれば確かに中二病に見えなくもない。騎士道物語がドン・キホーテの妄想を支えることと同じ構図で、2000年代以降、特定のマンガ・アニメが中二病を支えている。本章では、中二病が造語される以前から現在に近い形まで変容する過程の中で、働きかけていたアニメを中心に、典型的な作品をピックアップし、整流することを目的とする。

長大な歴史を誇るロボットアニメは90年代以前から、大人が支配する国家・社会を問題視してきた。そして主人公の少年が巨大ロボット兵器（＝大人に対抗できる力）を操る共通の設定を加え、不思議な力⁷⁾を憧れる邪気眼系の欲望を満たしつつ、体制への順応を拒否するDQN系の価値観をうまく体現しているといえるだろう。前章で挙げた『コードギアス』は2006年初出の作品群で、体系化された中二病から逆に影響を受けている可能性も否めないが、『機動戦士ガンダム』シリーズ（初代シリーズは1979年放映）なら70年代から既に中二病的な想像力を支えるイメージソースを安定供給してきた。ジオン共和国からきたジオン公国は共和制をやめ、ザビ家による独裁体制を基本とした君主制国家となっている。プロバガンダで人種的優越性を主張しつつ、大規模な虐殺を行う姿はナチスドイツを思わせる。その一方、ジオン公国の反対面に位置付ける地球連邦軍は、全人類の統一政府である地球連邦の軍隊とされている。連邦議会が首相を選出する民主政府の裏では、官僚主義、縦割り行政や事なかれ主義が蔓延している。二つの勢力はどれも問題だらけで、その泥沼のような戦争に、偶然にロボット兵器に乗り込んだ主人公の少年は巻き込まれる、ガンダムのストーリーはこのような設定からはじまり、大人が支配する国家・社会を問題視する伝統の下で生産され続けている。『巨大ロボットの社会学』の中でも、巨大ロボットを動かす力になしている官僚制的⁸⁾な「組織」の話題に触れている。軍事組織であれ、開発・メンテナンスの技術者の組織であれ、巨大ロボットの運用は「組織」によって支えられている。超技術の産物としての巨大ロボットでも、現場で運用可能なレベルに落とし込むための科学者集団が不可欠である。アニメでは青少年の視点からこれらの「組織」の不気味さ・不可解さを映し出しながら、彼らと「組織」の葛藤を描いてきた⁹⁾。そして戦闘が頻発するロボットアニメにおける国家・社会のほとんどは、官僚制的な「組織」の影響の下で存続されている。言うまでもなく、これら作品のどれも中二病とは非常に高い親和性を示している。言葉として中二病が誕生する20年前にも関わらず、中二病を支えるソー

スはすでにある程度、体系化されはじめた。仮想戦記の世界として示された作品は、随所仮想の世界で話を完結させないような工夫が施されている¹⁰⁾。それまでのロボットアニメではあまり見られないリアル志向から、視聴者が作品を通して自分を囲い込む現実世界を見つめなおしていたことも想像に難くない。プロパガンダへの免疫力を身に付けつつ、民主制国家をめぐる諸問題もしっかりと認識する。こういう具合で、社会や国家をはじめとする近代的な共同体への思考のきっかけとなるのであれば、本稿の意見として、ロボットアニメも良い教科書といえなくもない。そういう作品関連の想像力を持つ中二病に罹る人は、(想像力を駆使して) ロボットに乗って朽ち果てた世界から革命を起こすなり、渦巻く権力の中で麻痺している人々を守るなりするだろう。ただ、中二病を選んだ彼らにとって、キャラクターが直面する葛藤や生々しい問題が解決されることを画面の外で観て安心する、そして日常に戻るような、ただ作品を消費の対象にする受容の仕方は、有り得ないだろう。

言葉としての中二病と同時代に生まれたロボットアニメのもう一つの古典である『新世紀エヴァンゲリオン』(1995)は中二病を語る際欠かせない存在と思われる。この作品の中でもやはり、特定の十代の青少年しか操縦できない巨大生物兵器の設定が存在する。そして例によって戦略自衛隊の無力や、組織内部泥沼化している人間関係、秘密結社ゼーレによって操られている国連も描かれている。そこで自分は無力だが、十代の青少年に世界の命運を任せて、前線で戦わせる大人像が出来上がるわけだ。中二病を軸に改めて考察してみると、世界の裏に隠している秘密組織、世界を左右する力を持たされる凡人主人公、宗教や神話由来の概念の活用などの要素が後の中二病に決定的な影響を与えている。特筆すべきポイントとして、渚カヲルというキャラクターへの描写は後の中二病の言動に、一つ原型を提供している。彼は物語の終盤で謎の美少年として登場し、最後まで複雑な世界観を貫いた物語の中で、最初から世界の核心を知る者として描かれている。故に彼は人類のことを「リリン」と呼び、超越した生死観を持ち、人ならざる者としての達観した態度をとっている。物語の中では彼の謎めいた言葉は隠されていた世界の真実を示唆している。例えばテレビシリーズ第24話ではこのような会話がある(下線は筆者による)。

シンジ「A.T. フィールド！」

カヲル「そう、君たちリリンはそう呼んでるね。何人にも侵されざる聖なる領域。心の光。リリンも分かってるんだろ？ A.T. フィールドは誰も

が持っている心の壁だという事を」

人類の外に立つ超越的な立場、抽象的な語彙や概念の組み合わせ、会話でありながらもモノローグ風で格式の高い話し方。その難解な言葉遣いは、現在の中二病的な言語活動にとっては原風景的な存在ともいえるだろう。

作品の中であれ、リアルに中二病に罹る人であれ、言語に関して異常なほどの執着を示しているのは事実だ。日本で発症する場合、ドイツ語関連の発音やカタカナ英文、古語・旧字体・旧仮名遣、複雑な漢字、見慣れぬ訓読み、特殊ルビなどにこだわる語用はしばしば見られる。中学二年（14歳前後）から発症することが多いということから、臨界期と何らかの関係を持っている可能性は十分考えられる。一般的に母語獲得の臨界期が12歳前後にあると言われており、前述の執着はその直後から現れる。ここで挙げた傾向は総じて外国語への関心と自国語にあるマイナー要素への発掘の二つである。臨界期以降、言語体系がある程度定着することにより、体系内外の区分が比較的明晰になる。そこではじめて意識的に体系外の言語表現の習得・使用により、自らの体系から脱却しようとする¹¹⁾。それこそ14歳前後で発症する中二病的な言語活動の実態ではないだろうか。逆にそれより早い場合、意識的な習得ではなく、無意識的に獲得する傾向が強いため、脱却・異化自体が不成立になる。

大量な症例を提供している『中二病取扱説明書』では「自分の体の中に何か邪悪なものがある。¹²⁾」「死、殺、魔、凶、狂、闇、暗などのネガティブ系な単語がよく使われる。¹³⁾」などの現象を挙げているが、ロボットアニメはこのようなキーワードとは結び付き難い。このことを考察するにはやはり邪気眼に戻らねばならない。前章でも触れているが、邪気眼の造語は『幽☆遊☆白書』から影響を受けている。邪眼の持ち主飛影は魔界の妖怪であり、「黒炎」を操る「邪王炎殺拳」を駆使する。特筆すべきはその「邪王炎殺拳」最大の技が「邪王炎殺黒龍波」で、魔界の獄炎の化身である黒龍を召喚し自らが取り込み、自身の能力を高めるものとされている。そしてその力が強大すぎる故、自分もコントロールできない。この説明で分かるように、飛影の設定には「邪眼」、「邪王」、「炎殺」、「黒炎」、「黒龍」などダーク要素のある概念（『中二病取扱説明書』では「ネガティブ系な単語」と記したもの）があふれている。そして2000年代から、これらの要素に惹かれ、自らの想像力で再生産する人々は中二病や邪気眼と呼ばれるようになる。『中二病でも恋がしたい!』でもこのステレオタイプの再現に趣を置いている。元々同一キャラクターから由来する「黒炎」と「邪眼」のパロディで

ある「闇の炎」と「邪王真眼」をそれぞれ主人公とヒロインに与え、その上主人公の苗字が富樫（『幽☆遊☆白書』原作者・富樫義博のパロディ）で、ヒロインはほかのキャラクターから邪気眼と呼ばれている。アニメでは「闇の炎」と「邪王真眼」の間に作品単体では取まらない運命的な関係性を示唆し、主人公とヒロインの関係を進展させる呪術的な力場を与えているが、この運命的な関係性が指向しているのは正に『幽☆遊☆白書』であろう。

邪気眼と呼ばれる症例が示しているのは邪気眼系の傾向だけではない。『幽☆遊☆白書』などの作品は王道バトルものへのアンチの文脈なしでは成立しえない。90年代の時点では、「正義」や「勇気」などのありふれた道德教育的な主題だけのシナリオは段々通用しなくなってきた。一方、ヤンキー文化が全盛期を迎える中、ヤンキーや不良を主要人物としてアニメに登場させる作品も現れ¹⁴⁾、道德教育に加担しない姿勢を見せた。「死、殺、魔、凶、狂、闇、暗」などの概念はこの姿勢を示す記号としての側面を持っている。主流作品の世界観と決裂し、体の中に邪悪なものを感じつつ、これらの概念を自らと同一化する邪気眼は自分に課せられる規範への反抗を見せている。一方、体の中に邪悪なものを感じるものの、それでコントロールできない右手から「黒炎」が出せることはないし、急に「千里眼」が使えて視力が良くなることもあり得ない。物理世界の客観と自らが想像・認識する主観の間を隔たるこの矛盾に、邪気眼は悩まされる。そこで矛盾を解消するために起用されるのが「潜在する力」、「一般人には見えない」、「隠された真実」などの定型表現で、実に安易な説明ではあるが、それによって世界観レベルで、中二病的な世界と物理世界は一応両立し、より真実に近い前者は表面現象である後者の見えない支えとなる。明らかに、この構造はかなりの割合で初期フーコーの考え¹⁵⁾と合致している。初期フーコーにとって重要な認識として、ポジティブなものがネガティブなものによって必然的に裏打ちされ、後者が前者に対して、ある種の構成的な力を保持しているというものがある¹⁶⁾。ネガティブなものとは見えないものに執着する邪気眼とこのような中二病的な世界観を持つ作品にとって、フーコーのこの認識は自明的なものだといっても過言ではない。2010年代に頻出しているディストピア世界観の作品はその典型であろう。これらの作品では、しばしば秩序のある、幸福に満ちているユートピア的な世界を裏打ちするネガティブな要素を、顕在化することによって、ディストピアへの反転を見せる¹⁷⁾。そしてこのような構成に慣れ親しんでいる中二病的な視聴者は、むしろネガティブな要素が描かれる前から、潜在的なディストピアを自ら構築してしまうのである。

本章がこれまでそれぞれ組織・社会、言語活動、世界観に注目した三つの古典作品を挙げたが、中二病的な想像力にソースを提供したアニメ作品の中では、これらのごく限られた一部にすぎない。だが中二病関連作品の中で、これらの作品は古典として重要な位置を占めていることは間違いない。これまでの分析だけでも、大量なソースが出てきた。ここでは改めて整理しておこう：大人が支配する国家・社会にある諸問題、世界の裏に隠している秘密組織、青少年が扱う強大な力、宗教や神話由来の概念、抽象的な語彙や概念の組み合わせ、全てを見通した超越的な立場、モノローグ風で格式の高い話し方、ダーク要素のある概念、道徳教育への反抗。中二病的な想像力はこれらの要素によって影響されてきたのである。

2000年代から、概念としての中二病の出現とともに、深夜アニメは頭角を現した。90年代までのアニメ・マンガを通して温めた中二病は一気に深夜アニメと絡み合った。『Fate』シリーズや、『涼宮ハルヒ』シリーズ、『コードギアス』シリーズなど中二病的世界観を体現した数々の名作は2006年で一挙にテレビアニメで動き出した。『Fate』では宗教や神話由来の概念が目立つ。『涼宮ハルヒ』では青少年が扱う強大な力や抽象的な語彙や概念の組み合わせがしばしば見られる。『コードギアス』では大人が支配する国家・社会にある諸問題やモノローグ風で格式の高い話し方が取り入れている。そしてその延長線上にある2010年代では、ダークな魔法少女もの¹⁸⁾の誕生や異世界ファンタジー関連のアニメが大量生産されることなど、やはりますます多くの中二病的な要素がアニメに生かされている。

三 イメージ化される患者：徹底できない中二病

前章まで、本稿は中二病の諸概念を確認し、その概念が誕生以前から存在し、現在に近い形まで変容する過程の中で、働きかけていた典型的なアニメをピックアップした。前章の最後では深夜アニメが盛んだ2000年代から2010年代にかけて、中二病要素を取り入れたアニメが大量生産される動きを示した。ところで、中二病の概念がアニメに乗せられて認知度を高めていたと同時に、これらの作品から影響を受け、日常生活の中でも異質な言動を繰り返すリアル世界で暮らす人々にも、視線が集まってきた。その結果、リアル世界を舞台としたアニメの中に、中二病に罹る人は取り入れられ、中二病要素のある作品に夢申し、

異質な言動を繰り返すわけだ。そこで本章では2010年代アニメに注目し、これらのキャラクターの表象を辿る。ここで描かれた人たちは中二病キャラクターと呼ばれ、周りからのツッコミを受ける運命を背負わされている。困ったことに、この呼び方はしばしば前章で挙げられた飛影や渚カラルなどのような、中二病を一次的に生産するキャラクターと混同して語られている。本稿では区別するため、「中二病患者」と「中二病患者キャラクター」と標記する。ツッコミを受けるこれらの中二病患者キャラクターが革新的なのは、世間一般からの視点が作品の中に導入されていることで、いわばメタ的な中二病である。

メタ的な視点で中二病を描き出すキャラクターは『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』(2010)のキャラクター「黒猫」からはじまる。彼女はゴスロリファッションを着た女性オタク中二病患者キャラクターとして登場している。そして彼女一押しの作品は『MASCHERA ～墮天した獣の慟哭～』¹⁹⁾で、そのビジュアルイメージもやはり、本稿第一章と第二章で触れている『コードギアス』をモデルとするものである。物理世界の客観と自らが想像・認識する主観の間を隔たる矛盾を前に、中二病の論理から出発し、うまく説明する(説得はできていないと思われるが)、彼女は自分の中二病をある程度徹底しており、中二病を固く保持しつつも自ら中二病コンテンツを再生産し(例えば同人作品の制作)、日常生活と堂々と向き合う姿勢を示している。強気を見せる黒猫に対して、『僕は友達が少ない』(2011)において、羽瀬川小鳩は中二病を徹底できないところが魅力的である。周りからのツッコミに対応しきれず、動揺して熊本弁が出て、すぐ曲げてしまう。キャラクターを立たせるうえ、彼女の中二病はむしろ論破されるべきものとして描かれている。

2011年から現れた論破されるべき中二病の傾向はやがて極限まで強化され、中二病患者キャラクターのステレオタイプを完成させたのはさらに一年後のことである。世間一般からでも広く知られる『中二病でも恋がしたい!』はこの文脈の中で読み直さなければならない。中二病の世界観から常識社会に引きずり降ろされる瞬間が生むギャップを京都アニメーションが得意とする日常の小芝居に盛り込み、さらに高度なギャグセンスを加えて、物語の中心に小鳥遊六花というキャラクターを誕生させた。このキャラクターは強い邪気眼の傾向を持っている。例によって片目にカラーコンタクトでオッドアイにし、「邪王真眼」の設定を全うする。そして腕には繃帯、世界の裏に隠している秘密組織を想定し、ダーク要素のあるものを好み、抽象的な語彙や概念の組み合わせを多用した難解な言葉を話す。彼女の決め台詞は作品のキャッチコピーにもなっている。それは

つまり「爆ぜろリアル！ 弾けろシナプス！ パニッシュメント・デイス・ワールド!!」である。この作品の試みとして、常識人と中二病患者の二項対立の間に、元中二病患者で、「社会復帰」に努める主人公を挿入している。中二病と常識人の間に位置付けられ、彼の立場の揺らぎを通して、我々の前で両方それぞれから見える世界が広がっていく。常識から攻められるとすぐ曲げてしまう中二病ヒロインと、ヒロインの中二病世界観を覗き、自分の中二病時代を恥ずかしがり、必死なツッコミ振りを見せる主人公の働きを通して、中二病の表象はさらなるメタ化へと進む。結果として、中二病の外部からの視点を主軸とした、メタ化された中二病が中二病イメージのステレオタイプとして確立され、元来の中二病はむしろ疎外されている。そこにはポストモダン様式のように、外へと進んだ一方、内実が空虚になり、どこか虚しさが滲み出してしまう危機感があると言わざるを得ない。これこそポスト『中二病でも恋がしたい!』の時代における中二病表象が置かれている局面である。

ポスト『中二病でも恋がしたい!』の局面で突破を試みる一作が2014年の『異能バトルは日常系のなかで』である。タイトルが興味深いこの作品は、ツッコミに打たれ強い中二病患者の主人公に本物の異能力を持たせることで、議論はようやく中二病の内核へと前進しはじめた。つまり主人公の周りでは異能力の存在しないリアル志向の世界を展開させて、その中で中二病が作り出す世界観にとりあえず実在を与える。しかしそれは見かけだけの黒い炎で異能力としては役に立たない。そこで主人公に願望を充足させた後、アニメはこのような世界観の意義について疑問を投げかける。主人公の幼馴染が第7話で中二病患者の主人公に怒涛の言葉攻めを放つ場面があり、中二病の症例の一つ一つに対して、(作品の中の)常識人の立場から疑問投げかけている長大な台詞は当時話題となっていた。この台詞を前にして、中二病患者かどうかはともかく、人文系の研究に関心のある者(日本近代文学関係、西洋美術史関係、哲学思想関係など)も多少、刺さるところがあるのではないだろうか。本稿では割愛するが、現在の人文系の学問体系と中二病の繋がりには実に興味深い。

2010年代後半から量産され、しばしば疑わしいものとされる「なろう系」、「異世界転生系」のアニメもポスト『中二病でも恋がしたい!』の局面で面白い動きを見せている。例えば『この素晴らしい世界に祝福を!』(2016)のめぐみんというキャラクターは、魔法やダンジョンが存在する世界で、片目に眼帯を掛け、中二病的な言動を繰り返す。例えばドン・キホーテが類似に基づいて世界を認識する中世・ルネサンスの世界で旅をしていたら、その境遇は違ってくるかもしれ

ない²⁰⁾。同じように、世界観そのものが中二病的であれば、中二病的な言動があっても、異質的には見えない。それでも中二病患者・めぐみんが成立するのはやはり、現実を舞台とした世界から異世界へ転生してきた主人公により、世間一般からの視点が作品の中に導入されているからだろう。その結果、一度確立されたステレオタイプの中二病患者キャラクターにそのまま彼女が憧れ、妄想したのであろう異能力と異世界が与えられ、中二病的な世界観を持つ世界と中二病患者が同時に存在させる実験が展開されるわけだ。

これまで言及したキャラクター以外でも、神崎蘭子、材木座義輝、海藤瞬、伊万莉まりあ、山本美波²¹⁾など、現在に至る10年の間、中二病患者キャラクターをめぐって展開された歴史は明らかなものである。中二病の要素を持つ2000年代までの作品の蓄積から、中二病そのものを対象として扱うアニメが製作されるようになったが、それでもポスト『中二病でも恋がしたい!』の時代を正面から突破できた作品は未だに現れていないように思える。『異能バトルは日常系のなかで』は求心的な疑問を投げかけたが、作品が出した答えは期待されたほど納得できるものではないし、中二病をめぐる諸問題の解決を志向するものでもない。イメージ化された中二病患者はリアルの中二病患者を「治療」するキャラクターともいわれているが、「治療」の効果が期待できるかどうかについてはまだ疑う余地があるようだ。

一方、中二病患者がイメージ化される際、「萌え」、「かわいい」、「実は優しい」といったテンプレ属性が付与されている。これらは元来の中二病にあまり見られないもので、中二病イメージの改善と直結している。アニメをめぐる言説空間でこれらの作品を語る際、これらのテンプレに注目することが多いのだが、2000年代では、中二病がほぼ蔑称になりかけていた事実がある。中二病が「黒歴史」と化し、それを思い出させるあらゆる事柄を必死に否定・批判することを特徴とする「高二病」との連動を含めて、中二病へのネガティブ評価が圧倒的に多かった。前世紀における「オタク」イメージと同じように、自ら名乗り出るようなものでは決してなく、周りから「中二病認定」される人は笑いものにされる。この状況を逆手に取り、2010年代のアニメは中二病をギャグのネタとして取り上げ、ツッコミを浴びせる瞬間、中二病をめぐる演出はたちまちお笑いの文脈に投げ込まれ、ボケとして我々の前に呈示される。中二病は実害のあるものとしては決して描かないお約束の元で、現在では中二病をめぐる言論の環境が大幅に改善されている。

ところが、ツッコミの存在によって、「中二病をめぐる演出は結局ある種の

ボケである」という観方が要求されている。ボケつまり惚けることである以上、病との間の一線は自明であり、当然有害なものではない。これまで中二病患者のイメージ化によって世に広めた中二病のイメージは、この暗黙の了解によって支えられている²²⁾。当然作中の中二病的な言動は惚けるのではなく、作品の世界から出れば、ボケを構成するツッコミも見つからないだろう。既にある種のボケにすり替えられた中二病へのアプローチは、むしろ中二病を疎外させてしまうのではないだろうか。この問題を念頭において、次章では作品にみられる中二病的な言動を取り上げつつ、疎外された本来の中二病にアプローチを試みる。

四 「治癒」されないが「卒業」可能：自己の防衛装置としての中二病

2010年代から、中二病患者キャラクターがアニメ化され、人気を博したことで、メタ化された中二病への認知が広まり、場合によっては本来の中二病より、揶揄やツッコミの対象としてのイメージが先行されている。とはいえ、これらのイメージに現実的な根拠がないわけでもない。経験との対比の中で、視聴者からある程度認められているだからこそ、笑いをとれていると考えるほうが妥当だろう。そこでアニメ化された中二病患者キャラクターから出発し、中二病を改めて考察することにあたって、本稿は中二病と公共社会の関係に注目したい。

中二病患者をイメージ化する際、学校教育とはなかなか噛み合わないという特徴は、たびたび意識的に再現されている。羽瀬川小鳩は学校の勉強が壊滅的に苦手である。小鳥遊六花の場合、数学が苦手なのは勿論、進路報告に悩まされ、中二病語彙に大量なソースを提供している英語にも苦手の様子を示している。先生とのやり取りの中で現実逃避し、英語で自分の「第二人格」を表現しようとしたエピソードも描かれている（第3話）。彼女は最初、カタカナで片言の英語を話したが、すぐ諦めて英語訛りの日本語に切り替えたのだった。『異能バトルは日常系のなかで』第3話の冒頭、先生は主人公の英文和訳の答えに不満を表した。「Tom wakes up at 6:00 AM every morning」に対する彼の和訳が「トムは毎朝、六時に覚醒^{めざつ}める」で、「She continued crying in the dark room」は「彼女は昏い^{くら}部屋で慟哭^{ななき}続けた」と訳す。複雑な漢字と特殊ルビ、言うまでもない中二病的な言語使用だ。ここでポイントとなるのは、中二病の感性を込めた答えは、減点はされないものの、望ましい答えにもなっていないことだ。つまり、それは教育上、評価の対象にならない。もちろん、これらの表現は多少誇張な部分が

あり、「無駄」な知識こそ身につくが、中二病だから勉強ができないという論理はまずない。しかし中二病患者の実際の学力はともかく、中二病からダイレクト的に得た知識や感性などが伝統的な中高の勉学にほとんど役に立たないことは間違いないだろう。勉学の状況はあくまでアニメが取り上げた事象の一つで、実のところ、公共社会全般に対して、中二病患者はなかなか噛み合わないところがある。そもそも彼らはネット掲示板を含めた公共圏の中で、異質な言動を繰り返すことから、病的な症状として認識されていた。それは自ら異質物となることで、公共社会に対する拒絶を示しているにしか考えられない。中二病へのアプローチはここからはじめなければならない。

社会生活に必要な知識を習得する場所としての学校ではなく、規律訓練によって我々を従属させる装置として学校（特に中学と高校）を見る場合、定められたルールに従い、集団行動をとり、理性的な判断を行うことが主な評価ポイントとなる²³⁾。しかし、これまで見てきたように、中二病はこれらの基準とは最初から反対方向へと走っているように思える。本稿がドン・キホーテを40歳からの中二病とすることに疑問を感じる原因もそこにある。『狂気の歴史』と『言葉と物』の中で、フーコーはドン・キホーテについて言及している。類似のエピステーマーがもはやうまく機能しなくなった17世紀を背景に、ドン・キホーテは「物同士の類似のあいだを縫い世界を放浪する²⁴⁾」。木刀を魔剣と考える中二病の症例は正にドン・キホーテの行動とは同質的なものだといえる。中二病患者もドン・キホーテも、「空想的な同一化による狂気²⁵⁾」を持っていることは間違いない。しかし、騎士になろうとするドン・キホーテは自ら城主（宿屋の亭主）に従属することを求めるが、それに対して、中二病は従属されることを拒む傾向を強く持っている。または従属は一応認めるが、従属の対象が朦朧としている²⁶⁾。ミリタリー趣味と絡めた中二病の場合でも、自ら特定の勢力に臣服するのではなく、所属関係が固定しない傭兵や軍隊に在籍するだけの自由人など都合のいい立場が想定される。ルールに従うというゲーム論理に対して、中二病はチート²⁷⁾とゲーム放棄²⁸⁾を選ぶ。集団行動を強いる規律訓練に対し、中二病は個人主義²⁹⁾を徹底する。理性的な判断への翼賛に対し、中二病は狂気³⁰⁾を美とする。以上のことから分かるように、中二病は個人レベルで、規律訓練の上で成り立つ伝統的な学校教育システム、引いてはゲーム論理によって支配される社会にささやかな抵抗を成している。

公共社会に対するささやかな抵抗を成す側面を持つ中二病を、本稿は一種の「イメージ武装」として捉えたい。というのは、この抵抗は生理現象でもなく、

一貫とした論理も欠けており、中二病を支えているのは第二章で挙げたような作品群が提供する膨大なイメージのデータベースである。中二病の理屈は簡単に論破されても、それで中二病が「治癒」されることが期待できないのもこれが原因のように思える。「治癒」されない中二病でも、異質的な言動をある時点までやめることもある、この際使われる語彙が「卒業」である。「卒業」の場合、切断や断絶の意味の背後に隠れるものがある。それはつまり、「卒業生」として違う形で関係を維持することだ。「その他多数」の個体がお互い馴れ合う一般社会に再び溶け込んだ「卒業生」は、実存を脅かす馴れ合いと格闘することになる。しかし彼は簡単には負けない、何故なら中二病によって自己という芸術品を作りあげる営みに可能性が与えられたからだ。中二病以外でも、同じような恩恵を獲得はできると思われるかもしれないが、膨大な作品群によってある程度体系化され、名作とも呼べる良質な素材によって支えられている中二病患者のそれぞれの世界観は、論破されることこそあるが、崩すのは極めて難しい。それはいわば強固な自己の防衛装置として機能できる、本当の意味でのイメージ武装ではないだろうか。現に自己に重心を置いていることから、過度な個人主義へ走る傾向が懸念すべきところではあるが、中二病は極端な全体主義や権威主義とは相容れないところに筆者は期待している。

終わりに：バニッシュメント・デイス・ワールド

本稿はタイトルの「バニッシュメント・デイス・ワールド」から着手し、幾重にも重ねた言説と作品によって媒介されていく表象の次元から中二病を分析し、病のネガティブイメージに逆行する仕方でも考察を進めた。

第1章では「厨二病」、「邪気眼」など関連する語彙の説明からはじまり、2000年代までの、中二病の変容およびそれぞれの段階が呈する異なる傾向について記述した。最初から外部の立場からその状態を揶揄する用語として出発していることは、中二病を囲む社会環境を成している。第2章では90年代までの、中二病が造語される以前の作品の解析を通して、後の中二病の核を構成するソースを抽出した。この章はそれぞれ組織・社会、言語活動、世界観に注目した三つの古典作品を挙げ、アニメを通して70年代から2000年代までの接続を把握した。第3章では2010年代の新しい展開、つまり中二病患者のイメージ化に注目する。患者はアニメキャラクターになる、そしてツッコミの前で彼らの中二病

は徹底できない。そこで中二病の外部からの視点を主軸とした、メタ化された中二病が中二病イメージのステレオタイプとして確立され、元来の中二病は疎外されていく。第4章では中二病は公共社会と噛み合わない現象から、中二病の規律訓練や従属されることを拒む傾向を指摘した。さらに「治癒」と「卒業」の分析を通して、中二病をある種のイメージ武装として捉え直した。

改めて言おう、「バニッシュメント・デイス・ワールド」、中二病はこのようなものとして理解すべきだ。既成のルールや規範にきっちり嵌める従属的な世界を一旦放逐し、感性に任せて膨大なソースから概念を掬い上げ、自らの記号体系の中で練り直すことで、規律を狂わせつつ、自らの世界を創りだすことこそ、「バニッシュメント・デイス・ワールド」という中二病的フレーズが開く新たなる回路である。それを中二病的に表現するのなら——「魔術回路」ともいうべきだろう。

注

- 1) 本文でまた改めて取り上げるが、この主張について、本稿としてはやや疑問を感じている。
- 2) 株式会社レッカ社『中二病超図鑑』株式会社カンゼン、2013、pp. 2-3
- 3) 同前、p. 3
- 4) 塞神電夜『中二病取扱説明書』株式会社壽屋、2008、pp. 2-3
- 5) 一人が二つの傾向を兼ねる場合もあるので、ここで挙げた三つの傾向によって中二病をめぐる人物や作品をくっきり分類できるとは限らない。そのため本稿は基本的に邪気眼ではなく、中二病と表記する。
- 6) セルバンテス『ドン・キホーテ』岩波書店、牛島信明 訳、2001
- 7) ここでは具体的に、ロボットの武力、またはロボットをうまく操縦できる才能（例えば「ニュータイプ」）が挙げられる。
- 8) ここでの官僚制の概念はマックス・ウェーバーによるもので、『巨大ロボットの社会学』の説明を引用すれば、それはつまり「規則や上下関係（命令系統）を明確にとり決め、個々は定められた専門的な職務に集中することを可能とする組織の仕組みである」。「こうした組織のメカニズムがうまく機能すれば、官僚制は極めて合理的なものであり、[中略]しかし、この官僚制が「本来の目的」（軍であれば敵に対する勝利や防衛）に対して合理的に機能するばかりではないことは、先の『ガンダム』のエピソードからでも明らかである。」（同著 pp. 85-86）（筆者：『『ガンダム』のエピソード』は第4話のアムロ、プライトらとルナター方面軍司令官のやり取りのことである。本稿では紹介を省略する）
- 9) 木村至聖、「[組織]としての巨大ロボット」、(『巨大ロボットの社会学 戦後日本が生

- んだ想像力のゆくへ』、2019) pp. 79-94
- 10) 『巨大ロボットの社会学』の中で挙げられた例として、1970年代後半から、日本的な集団主義経営が「組織の時代」を支え、安保闘争などで大人に反抗してきた若者が葛藤を抱えながらも（会社に就職するなどによって）「組織」に取り込まれる。ガンダムはこのような現実世界と密接に結びついている。『エヴァンゲリオン』に関してもバブル崩壊後の暗い世相が組織のドロドロな内実には反映されている（同著 pp. 81-91）。
 - 11) 実際の状況を考えて、脱却が失敗し、異化に留まる場合が大半である。カタカナ英文はその典例といえる。
 - 12) 塞神電夜『中二病取扱説明書』株式会社壽屋、2008、p. 39
 - 13) 同前、p. 101
 - 14) 『幽☆遊☆白書』の主要人物四人の中では主人公を含めた二人が不良として描かれている。
 - 15) 具体的には『狂気の歴史』までのフーコーの考え
 - 16) 慎改康之『ミシェル・フーコー——自己から脱出するための哲学』岩波書店、2019、pp. 52-55
 - 17) 例えば『新世界より』（2012）、『翠星のガルガンティア』（2013）
 - 18) 例えば『魔法少女まどか☆マギカ』（2011）、『結城友奈は勇者である』（2014）、『魔法少女育成計画』（2016）、『魔法少女サイト』（2018）、『魔法少女特殊戦あすか』（2019）
 - 19) 『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』の設定上にもみ存在するテレビアニメである。実際の製作・配信は行われてない。
 - 20) ミシェル・フーコー『言葉と物』第三章を参照
 - 21) キャラクターの典拠：『アイドルマスター シンデレラガールズ』（2015）、『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』（2015）、『斉木楠雄のΨ難』（2016）、『この美術部には問題がある！』（2016）、『女子高生の無駄づかい』（2019）
 - 22) 海外では中二病患者キャラクターを介さない中二病の情報が少ないため、ボケーツッコミによって構成される中二病のイメージが先行する場合も多い。
 - 23) 長谷正人『ヴァナキユラー・モダニズムとしての映像文化』東京大学出版会、2017、pp. 213-229を参照。
 - 24) ミシェル・フーコー『言葉と物—人文科学の考古学—』新潮社、渡辺一民・佐々木明訳、1974、pp. 71-83
 - 25) ミシェル・フーコー『狂気の歴史—古典主義時代における—』新潮社、田村俣訳、1975、pp. 52-57
 - 26) 例えば自らが想定する王国騎士の立場に対して、王も国もあまり考えないこと
 - 27) 例えば「禁忌破り」への憧れ。
 - 28) 例えば中二病の根源についてよく挙げられている「現実逃避」。
 - 29) 敵対組織に対抗する個人の設定は個人主義をうまく体現している。
 - 30) 例えば「混沌」への憧れや「右腕が疼く」、「理性が吹き飛ぶ」などの言い回し。

引用文献・参考文献

- 株式会社レッカ社『中二病超図鑑』株式会社カンゼン、2013
- 塞神電夜『中二病取扱説明書』株式会社壽屋、2008
- 池田太臣、木村至聖、小島伸之、『巨大ロボットの社会学 戦後日本が生んだ想像力のゆくへ』法律文化社、2019
- 慎改康之『ミシェル・フーコー——自己から脱出するための哲学』岩波書店、2019
- ミシェル・フーコー『フーコー・コレクション〈1〉狂気・理性』筑摩書房、2006
- ミシェル・フーコー『フーコー・コレクション〈4〉権力・監禁』筑摩書房、2006
- ミシェル・フーコー『言葉と物—人文科学の考古学—』新潮社、渡辺一民・佐々木明 訳、1974
- ミシェル・フーコー『狂気の歴史—古典主義時代における—』新潮社、田村俣 訳、1975
- ジル・ドゥルーズ&フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス 資本主義と分裂症』河出文庫、2006
- セルバンテス『ドン・キホーテ』岩波書店、牛島信明 訳、2001
- 仲正昌樹『ドゥルーズ+ガタリ〈アンチ・オイディプス〉入門講義』作品社、2018
- 真田信治『社会言語学の展望』くろしお出版、2006
- 石岡良治『現代アニメ「超」講義』PLANETS、2019
- 蘇珊・桑塔格『疾病的隱喻』上海譯文出版社、程巍 譯、2003
- (Susan Sontag, *Illness as Metaphor and AIDS and Its Metaphors*, Doubleday, 1990)
- Sean Homer, *Jacques Lacan*, Routledge, 2005

(じょ・しょよう 早稲田大学文学研究科 博士後期課程)